

12月7日ゼミは開催します**朝鮮半島の倭人勢力～狗邪韓国から任那日本府へ～**

—12月7日ゼミ紹介文：飯田眞理会員記—

【はじめに】縄文時代からの北部九州と朝鮮半島南部の共通する遺物からは、人々が頻繁に海を渡っていたことを示している。

とりわけ弥生時代以降には、朝鮮半島南部に倭人が居住していたことがわかる。また、日本書紀に記す「任那」と『日本府』についても検証した。

～ゼミでは詳しく解説するが一部を記す～

1. 任那とはどの地域のことか

「任那」は決して日本書紀だけの地名ではない。中国と朝鮮の多くの史料に記されている。任那と地域としては、狭義と広義の意味で用いられている。狭義としては、現在の慶尚南道金海市に存在した狗邪韓国＝金官国のことである。広義は、金官国を中心とする伽耶諸国を指す。

2. 朝鮮半島南岸地域は倭人の居住地だった

(1) 考古学からの列島と朝鮮半島との関係

★朝鮮半島と日本列島とは、縄文・弥生時代から古墳時代まで長期にわたり、互いに文化の交流が頻繁に行われていたことが考古資料より判明している。単なる交流ではなく、朝鮮半島と北部九州とは互いに人の移動があったと考えられる。

①朝鮮半島の倭系遺物

【縄文時代】東三洞貝塚（釜山）など

- *九州の縄文土器と櫛目文土器
- *貝殻製の面
- *九州産の黒曜石と結合式釣り針

【弥生時代（原三国時代）】

- *金海貝塚・鳳凰洞遺跡
- *中広銅戈、広型銅矛
- *小型仿製鏡や無茎鉄鏃
- *弥生系土器出土遺跡（勒島から金海）

【古墳時代】

- *大成洞墳墓群と良洞里墳墓群
- *ヒスイ製の勾玉の出土地
- *松鶴洞1号墳（固城＝古自国）

～6世紀半ばからは

倭系遺物は出土しなくなる。～

(2) 文字史料からわかる朝鮮半島の倭人

【魏志倭人伝と魏志韓伝（和訳文）】

- (i) 「(帯方) 郡から倭に至るには・・・その(倭の) 北岸の狗邪韓国に到着する。
- (ii) 「韓は帯方の南に在り。東西は海を以って限りとなし、南は倭と接す。」
- (iii) 「(弁辰) 瀆盧国は倭と界を接す。十二国はまた王あり。」

★以上より、弁辰狗邪國＝狗邪韓国は弁辰十二国の一つであるが、倭人が住む国であったと考えられる。

【高句麗・広開土王碑文】

★倭に関する記事の要点の一部は次のようになる。

- (i) 倭が(391年)に海を渡り、百済などを打ち破って新羅を臣下としたが、王は水軍を率いて百済国を討った。九年己亥399年、百残、誓いに違ひ倭と和通す。
- (ii) 九年己亥(399年)倭人が新羅の城池を潰破し、奴客を民とした。高句麗は新羅を救うために軍を派遣した。倭は新羅城から退却して、高句麗軍は任那加羅の城を帰服させた。

(iii) 十四年甲辰(404年)、倭不軌にして帯方界に侵入した。・・・高句麗軍は無数の倭兵を惨殺した。

* 高句麗が倭と戦ったとき、背後をついて占領した「任那加羅の従拔城」は倭軍の拠点であったことは間違いない。つまり倭軍には朝鮮半島の倭人が含まれていたのである。倭軍の援軍として安羅戎兵が共同して高句麗と戦ったことも、朝鮮半島の倭兵であることを補強する。

* 一方で「倭国が海を渡り、百濟などを打ち破って新羅を臣下とした」との記述からは、北部九州からも派兵していたことになる。

【三国史記・新羅本紀】

★ 朝鮮の史料『三国史記』が編纂されたのは12世紀であるが、日本書紀・神功紀の新羅征服の記事は、新羅本紀の内容を改変したものであることがわかる。つまり8世紀以前に、三国史記・新羅本紀の元になった史料が存在したのである。よって、新羅本紀はそれなりの史実を反映したものと考えられる。その新羅本紀には倭人の侵攻の記事が極めて多く記されている。特に新羅の建国以前にあたる「辰韓の斯蘆国」の時代のものが多い。全て真実とは思われないが、倭人が斯蘆国や新羅に侵攻していたのは事実と考えられる。以下に主な記事を和訳文で記す。

* 沾解尼師今三年(249年)

「夏四月倭人が于老を殺した。」

* 訖解尼師今三年(312年)春三月「倭国の国王が使臣をつかわして、息子のために求婚したので、王は阿飡の急利の娘を倭国に送った。」

* 三十五年344年春二月「倭国が使者をつかわして、婚姻を請うたが、すでに以前に女子を嫁がせたことがあるので断った。」

* 三十六年345年二月「倭王が、書を送って国交を断ってきた。」

* 三十七年346年「倭兵が風島に来て、進んで金城を包囲して攻めて来た。」

★ 于老の殺害事件の後、新羅の女と倭王との婚姻により、一時的な和平が結ばれたよう

である。しかし、2度目の求婚を新羅が断ったことにより、倭国は再び新羅を攻めることになる。

三十八年393年「倭人が来て金城を包囲し、5日も解かなかった。」

* 實聖尼師今元年402年三月「倭国と通好して、奈勿王の子、未斯欣を人質として倭に送った。」

★ 訖解尼師今と次の實聖尼師今の時代が、広開土王の時代である。記載の内容は広開土王碑文とおおよそ合致する。

* 同年秋 「堤上が、人質であった未斯欣を倭国から逃げさせた。堤上は倭人に殺された。」

【日本書紀・神功紀との関係】

★ 未斯欣を人質としたなどについては、日本書紀には次のように記している。

「仲哀9年：皇后がもっておられて矛を新羅王の門にたて後世への印とした。その矛は今も新羅王の門にたっている。波沙寝錦(第5代王・婆娑尼師今)は微叱己知波珍干岐(未斯欣)を人質とした。一ある説によると、新羅王宇留助富利智干(于老)はお出迎えしたて頭を地につけて・・・」

★ 新羅本紀の、「第5代王・婆娑尼師今」と「未斯欣」と「于老」の3人はそれぞれ年代が異なる。それを日本書紀では、同じ新羅征服のときに登場させている。

・また、「未斯欣の帰還」と「于老の殺害」についても、新羅本紀と細部までほぼ同じ内容が、神功5年の記事に、倭国に都合よいように改変されて記されている。つまり、日本書紀の編纂者は新羅本紀の元資料を参考にして、神功紀を創作したのである。ところが「新羅が阿飡の急利の娘を倭国に送った。」ことは、日本書紀には記されていない。日本書紀編纂者は、天皇(大王)の妃が新羅の女であったようなことは認めたくなかったのであろう。

《倭軍の本拠は北部九州》

★ 新羅本紀の多くの記事から倭軍の本拠地は北部九州であることがわかる。

* 侵攻の時期がほとんど春夏の3月～6月で

ある。海が荒れている秋～冬は対馬海峡や朝鮮海峡を渡るのは危険である。

*倭は、海を渡ったところで対馬に近いところとしてよいだろう。人質となった末斯欣と倭王が居たところも、対馬に近いところ（玄界灘沿岸）であるように記されている。

ヤマト王権が成立してまもない4世紀に、新羅の女を遠く離れたヤマトの大王が妃にしたことはあり得ない。新羅の女と婚姻関係を結んだ倭の王は、北部九州の倭の王であることになる。

3. 「任那・日本府」の実像を探る

日本書紀に記す任那関係の記事のすべてを検証した。「任那・日本府」については、戦前から様々な説が唱えられてきた。その中の一つが、ヤマト王権が任那を支配しているその出先機関が「任那・日本府」であったとする説である。日本書紀を読む限り、到底そのような説が成り立たないことがわかった。「日本府」という語は何度も記されているが、ヤマトから独立した組織であるようにはっきりと記されている。任那の滅亡の前に、「日本府」のリーダーたちが新羅にすり寄っていたことも記されている。「日本府」がヤマト王権の出先機関ではなかったことは明白である。にもかかわらず、なぜ、「任那日本府」がヤマト王権の出先機関であるとの説が出てくるのであろうか。まさにヤマト天皇中心歴史観からの自己中心的な説である。これまでも述べてきたが、ヤマト天皇中心史観は真実を探る障害になっている。現在学会では「任那日本府がヤマト王権の出先機関であった」との説は、ようやく否定されつつある。しかし一般の古代史ファンには無意識の民族主義からか、この説を信じている人が多い。自国を愛することは重要だが、過度に自国に対する優越感をもつ似非愛国主義は歴史の真実の解明の障害になっているように感じられる。重要なことは、政治思想や民族主義思想にとらわれることなく、古代の真実を探求することである。以上。

ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館（水道橋駅）・中会議室（5階）
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。
- 3、会場には12時30分から入場できます。

先史中華民族考

—磐城 妙三郎会員記—

夏・殷・周王朝を樹立した黄河文明が古代中国の代表とされてきた。しかし1970年代の長江下流域の河姆渡遺跡の発見以来、長江中流域でも最古の稲作文化を伴う環濠集落遺跡や城壁都市遺跡が発見され、これまでの黄河文明に偏った王朝中心史観が見直されている。また遼河流域の遼河文明にも新石器時代の興隆窪文化（BC6200年～BC5400年）や紅山文化（BC4700年～BC2900年）と呼ばれる遺跡が存在し、黄河文明の新石器時代の裴李崗文化（BC7000年～BC5000年）や仰韶文化（BC5000年～BC2700年）などの遺跡との類似性が高いことが判明している。黄河文明も遼河文明も北緯35度より北方に位置し竪穴式住居に暮らし、粟などの雑穀畑作農耕を継続し、稲作は行われていない。一方、北緯35度より南方に位置している長江文明を稲作文化の起源地とする見方が定着しつつある。したがって先史中華民族は同じモンゴル系民族ではあるが北方系と南方系で言語も異なる民族であったと推測されている。北方系民族が勢力を拡大して南方系民族を同化させ、やがて秦・漢などの王朝によって統一された。北方系民族は華夏族と呼ばれたが、その西方にはタリム盆地の西戎、北方にはモンゴル高原の北狄、東方には遼河平原の東夷に囲まれ常に異文化が流入してきた。特に西方からは西アジアの彩陶、青銅器、鉄器、馬車など高度な文化がチュルク系遊牧民によってもたらされた。また北方からは騎馬文化が、東方からはツングース系民族によって毛皮文化がもたらされた。こうした交易を通じて、漢字の発明や階層化が進行したと考えられる。またチュルク系、ツングース系民族との混血も行われたことも推測される。

南方系民族は華夏族からは南蛮または三苗と呼ばれていた。5千年前（春秋以前）には長江下流域に仮称古呉族と仮称古越族が良渚文化（BC3500年～BC2200年）、中流域には仮称古楚族が屈家嶺文化（BC3000年～BC2600年）の城壁都市を築いていた。

稲作や漁労を生業に玉器、養蚕、織物などの手工業も開始された。また BC2000 年頃になると長江下流域や中流域で青銅器の生産が開始される。青銅器は BC3000 年頃、黄河文明の仰韶文化晩期に西方から流入したことが判明している。しかし黄河地域には銅や錫の資源が見つからず、華夏族は豊富な食料と青銅資源を求めて南下を開始して古呉族、古越族、古楚族を征服・同化し、その支配地域を拡大させていった。その過程において南北の文化が融合し、長江流域では青銅器生産が開始され、黄河流域では稲作が導入された。征服された部族は避難民として周辺地域へ拡散して、その一部が長江上流域（四川省）に龍馬古城宝墩遺跡や三星堆遺跡の古蜀文化を開いたと推測される。さらに BC3000 年頃からといわれているオーストロネシア祖語を話す部族（古呉族、古越族、古楚族の内の一部）の台湾、フィリピンへの移住、さらには太平洋諸島への拡散の引き金となった。古呉族、古越族や古楚族の末裔は春秋時代にはそれぞれ呉（BC585 年頃～BC473 年）・越（BC600 年～BC306 年）・楚（BC11 世紀～BC223 年）を建国して、北方の晋（BC11 世紀～BC376 年）、宋（BC1100 年～BC286 年）、齊（BC1046 年～221 年）、秦（BC905 年～BC206 年）などの諸侯国と覇権を競うが、ついに BC221 年、秦によって全国が統一される。一般に漢民族と呼ばれているが、彼らは華夏族を主体とし、西戎、北狄、東夷、南蛮の諸民族との混血によって成立した北方系民族と見て良いのではなかろうか。秦によって征服された南方系の呉・越・楚の難民は百越と呼ばれ、雲南省、貴州省、広西ほかベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーなどに少数民族として現在も暮らしている。その主な民族が苗族・ヤオ族と倭族である。文化人類学者の鳥越憲三郎氏は著書「古代中国と倭族」に倭族の習俗と日本の弥生時代以降の習俗との類似点から百越の難民は朝鮮半島の中南部や日本の九州北部を倭人の地としたとする仮説を提唱している。倭族の習俗としては村落の様子や村人の服装などを取り上げ次のように伝えている。村落の入り口に鳥居を設け、縄をめぐらせ、村の中には御神木が竹垣で囲われ神域とされる。建物は高床式で妻側の破風板が伸びて千木のように交差しており、日本の神社建築の原形を思わせる。服装に関しては風通しの良い貫頭衣と腰巻を着けた倭人伝の表現とも一致する。同様に断髪、分身（入

れ墨）の習俗も現代まで引き継いでいる。了

投稿文を募集します

引き続き、ニュースに掲載する投稿文を募集します。感銘を受けた読書の感想、旅行先での思い出や体験、新しい発見等をご披露下さい。初めての方も歓迎です。

ゼミ・テーマに関する要望・意見

今後のゼミ・テーマに関して、ご意見や要望等があれば、お近くの理事さん宛に口頭やメールでお寄せ下さい。

来年9月ゼミの日程変更

気候変動により猛暑の夏が1か月間延びました。来年以降も9月の猛暑は続く予想されます。従って、来年9月のゼミはお彼岸前後に繰下げます。2025年は9月20日(土)に変更しますのでご了承下さい。

次回1月11日ゼミ・テーマ

「邪馬台国は宮崎市にあった」。「邪馬台国宮崎市説・欠史八代説・神武崇神同一説からヤマト王権の成立を考察する」—土田 章夫会員

以上。